

【1】小学部教育の基本的な考え方とからだづくりをめざした教育課程の編成

「友だちの中で、よろこんで取り組む子」これが小学部のめざす子ども像である。「友だちの中で」ということばの中には、自分だけの遊びの世界から脱却し、友だちと関わりをもって活動できるようになって欲しいという思いが託されており、また「よろこんで取り組む」ということばの中には、物事に興味関心を示し、生き生きと没頭して取り組む力を育て欲しいという思いが託されている。

学校教育にあって、小学部は、義務教育の最初の段階である。これまで、障害との関わり、あるいは様々な状況に置かれた中で、先に掲げたような子ども像にはまだ程遠い児童たちが入学してくるが、将来「遊び的労働」を媒体とする中学部の生活につなげていけるよう、先の展望も踏まえて教育実践を行っている。



図1 段階別教育内容表Ⅲ段階到達度の変容

右図1は、本校が開発した段階別教育内容をK児が2年間かけて習得してきた様子を示したものである。我々は、学習したことが子どもたちに定着し、このグラフが少しでも広がっていくことをめざしている。その際、「意欲・態度、身体的分化」等を含めたからだが大きく関与することに着目し、このからだづくりを通してめざす課題に迫っていこうとしているのが本研究である。

我々は、小学部の児童の精神発達の特性、身体的特性、及び障害を次のように捉え、学部の基本方針と関わらせながら、次のような教育課程を編成してからだづくりを実践してきた。

(1) 小学部の児童の身体的特性、精神発達の特性、及び障害

とからだづくりについて

① 身体的特性

右図2は、小学部3クラス（低学年、中学年、高学年）の平均身長と平均体重を示したものである。この図から学年が進行するに伴って、児童の身長・体重は目ざましく伸びていくことが分かる。従って、小学部は体格といった面では非常に幅のある学習集団であるといえる。

また、MEPAの検査結果によれば、運動感覚の発達は全児童のほとんどが3歳を通過し、約半数の児童が4歳を通過する段階にあるというのが実態である。従って、協応動作など調整力といった面でも遅れが見られるのが特徴である。

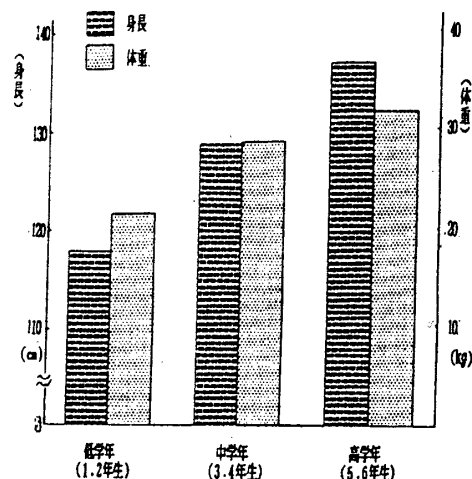


図2 各学級の平均身長及び体重

② 精神発達の特性

暦年齢6歳から12歳、発達年齢は、2歳から6歳6か月である。遊びの発達という面から小学部の児童を捉えれば、P.20に示すように、感覚運動遊びの段階の児童、みたて・つもり遊びの段階の児童、仲間遊びの段階の児童に、まずは大別できる。このことから、我々は発達段階に合わせた多様なニーズを満たす活動を準備しなければならないことが分かる。

さらに、P.19に示すように発達検査の結果をみれば、全体的に「移動運動」「手の運動」「基本的習慣」に比べ、「対人関係」「発語」「言語理解」に劣るという傾向が見られる。つまり、知的発達に関わる部分は相対的に低く、逆に「基本的習慣」など生活年齢効果と考えられるものは相対的に高い段階にあることが分かる。

また、自閉児は4名いるが、彼らは少し異なった特性を示し、知的発達は仲間遊びの段階にあっても関わって遊ぶことは難しいという実態がある。さらに発達検査の結果を見れば、「対人関係」「発語」「言語理解」の項目が、相対的に際だって低いという特徴が見られる。

③ 障害について

P.18に示すように小学部の児童の有する障害は多様である。自閉児が4名、てんかんを有する児童が4名いる。自閉児については、環境整備及び生活の見通しづくりという配慮が特に必要となる。また、てんかんを有する児童については、服薬と生活の様子とのバランスを見ながら、生活リズムをきちんと作っていくことが必要となる。

また、これまでの誤学習から、土踏まずの形成がうまくできていない児童、外反拇指を有する児童も数名おり、これらの問題に対する取り組みも必要である。

(2) からだづくりに視点をあてた教育課程の編成

小学部では、従来より、「動くことを学ぶ」「動きを通して学ぶ」ことを窓口として、運動技能そのものばかりではなく、身体意識、知覚機能、言語、数概念、その他教科学習の発達の素地づくりをするムーブメント教育を理論的な背景とする教育実践が行われてきた。

昭和63年度、本研究が発足してから、このムーブメント教育の理論は、より一層意識され、実践されるようになった。(右図3参照)

そこで、小学部においては、このムーブメント教育の理論を背景としながら、先に掲げた目指す課題を実現させるために、児童の身体的特性、精神発達の特性、及び障害を踏まえ、次のような教育課程を編成して研究実践をすることにした。

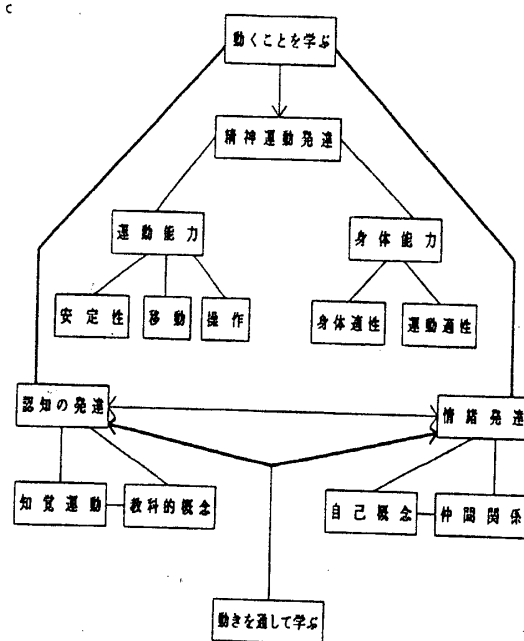


図3 ムーブメント教育の構造図

(小林による)

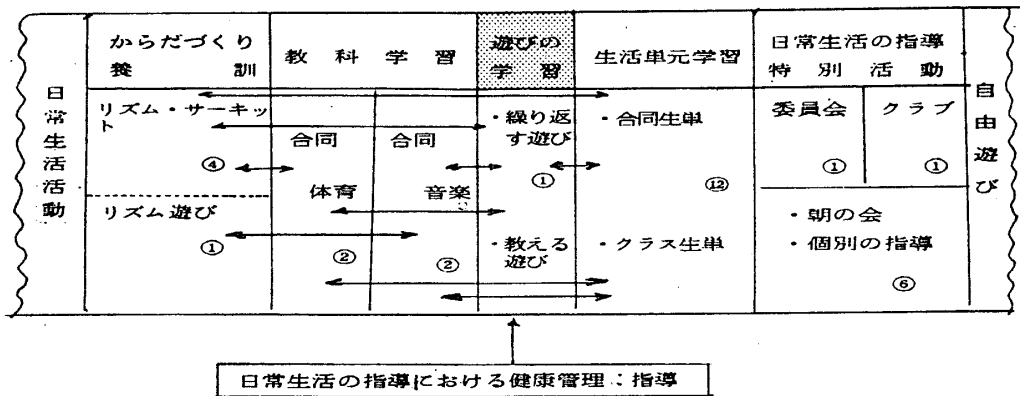


図4 教育課程模式図

注) ・○内は週時数(中学年のものを示している)
 ・低学年においては、委員会及びクラブの時間はない。
 ・生活単元学習の時間は1時間増える。
 ・高学年においては、生活単元学習の時間が1時間増える。

① 週時表、及び指導内容の工夫

- a 1校時—日常生活の指導、個別学習、2校時—教科学習(体育、音楽)、遊びの学習、3・4校時—生活単元学習(合同・クラス)、5校時—からだづくり養訓を基本とした帯を週時表に設け、生活リズムの確立を図った。
- b 生活単元学習を中心に、体育、音楽、からだづくり養訓の中に遊び活動を意図的・組織的に入れ授業の活性化を図った。
- c 本年度より、遊びを学習させる「なかよしタイム」と称する時間設け、児童に遊びを獲得させるとともに、教科・領域の中で行っている遊び活動との連関を図った。
- d からだづくり養訓を、5校時に带状にとり、児童の感覚運動の発達を目指した。また、副次的に体の矯正的な指導も行った。
- e 本年度より、からだづくり養訓の中に主として聴覚機能と運動との連合をねらった「リズム遊び」と称する時間を設け、児童の一層の感覚運動の発達を目指した。
- f 朝のかけだしである1校時目を、日常生活の指導及び個別学習の時間として設け、ゆったりとした時間の中で、健康観察をするとともに、1日の生活に向けての態勢づくりを行った。

表1 からだづくりの3場面

運動	からだづくり養訓(リズム・サーキット、リズム遊び)
	・楽しみながら、鍛え育てるからだづくり
	体育(しっぽとりゲーム、「忍者ハットリくん」など)
	・鍛え育てたからだを生かし使い、さらに育てるからだづくり
	遊び活動を重視した生活単元学習(炊飯遠足、たなばた発表会、運動会)
	・鍛え育てたからだを生かし使い、さらに育てるからだづくり
健康管理(日常生活の指導、家庭との連携)	・健康なからだをつくる、保つ

表2 小学部の週時表

	月	火	水	木	金	土
9:00	登校・着替え・持ち物の整理					
	日常生活の指導・個別の指導・朝の会					
9:45	体育	音楽	遊びの学習	体育	音楽	生活単元学習
10:25 10:45	生活単元学習					着替え 帰りの会
12:00	給食・後かたづけ・洗面					
12:50	掃除・自由遊び					
13:30	からだづくり養訓 (リズム・サーキット、リズム遊び)					
14:10	クラブ	(14:30) 下校		委員会	(14:30) 下校	
14:50	着替え・持ち物整理・帰りの会・下校					
15:30						

注) これは、中学年の週時表である。
 低学年は、クラブ及び委員会の時間はない。木曜日、委員会の時間は生活単元学習を行っている。
 高学年は、火曜日にさらに生活単元学習が1時間加わる。